

第3学年A組 社会科学習指導案

場所

指導者 XXXXXXXXXX

1. 単元 冷戦と日本の発展

2. 目標

- (1) 冷戦とそこでの日本の発展に関する基本的事象（冷戦の背景・経過、世界の動き、日本の行動など）について理解することができる。（知識及び技能）

- (2) 冷戦の背景・大国の思惑やそれによる影響など、複数の歴史的事象の因果関係や相互の影響に注目し、それらを関連付けて考察することができる。
異なる立場や視点を踏まえて、歴史的事象を多角的・多面的に捉えることができる。
(思考力、判断力、表現力)

- (3) 自ら問いを立てて学習に取り組み、必要な資料や学習方法、協働相手などを選択しながら粘り強く考察を深めようとすることができる。
(学びに向かう力、人間性等)

3. 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・冷戦とそこでの日本の発展に関する基本的事象 （冷戦の背景・経過、世界の動き、日本の行動など）について理解している ・多様な資料から必要な情報を的確に取り取り、目的に応じて活用している	・冷戦の背景・大国の思惑やそれによる影響など、複数の歴史的事象の因果関係や相互の影響に注目し、それらを関連付けて考察している ・異なる立場や視点を踏まえて、歴史的事象を多角的・多面的に捉えている	・自ら問いを立てて学習に取り組み、必要な資料や学習方法、協働相手などを選択しながら粘り強く考察を深めようとしている

4. 生徒の実態とつきたい力

多くの生徒は、課題に取り組む際にまず教科書を中心に情報を集め、課題にかかわる部分に線を引いたり、ドキュメントに整理したりすることができている。そのため、単元の目標に直結するような出来事や重要な事実には自然と目が向くようになっており、「どこが大事か」という見極め自体は、多くの生徒が一定のレベルで身につけ始めているように感じられる。

ただし、その先の学習の深まりには生徒によって差がある。勉強を苦手とする生徒は、出来事を「点」でとらえることにとどまってしまう、教科書の記述をそのままメモに写すだけで終わってしまう傾向がある。そのため、出来事を「なぜ起きたのか」「その後どうなったのか」といった因果関係につなげたり、課題に結びつけて自分の考えを形にしたりするところまでは十分に到達できていない。逆に勉強を得意とする生徒は、最初から自分なりの考えを持ち、それに必要な根拠を探しながら学習を進めることができる。そして、それを他の生徒と共有し、討論する中で多様な見方に触れ、さらに自分の考えを深めていく姿も見られる。そうした生徒がいることで、クラス全体の学びがより厚みを増している。

一方で、クラス全体の課題としては「思考の共有」が十分に広がっていないことが挙げられる。スプレッドシートの「みんなの疑問」欄を見ても、疑問を積極的に提示する生徒やそれにコメントを返す生徒は限られており、結果として一部の生徒同士のやりとりにとどまってしまう。もし、この機能がクラス全体で活発に使われれば、勉強を苦手とする生徒は「自分では気づけなかった視点」や「同じレベルの疑問」を通じて学びを広げることができ、勉強を得意とする生徒も「他者にわかりやすく伝える」ことを通じて思考をさらに深めることができるだろう。つまり、疑問を共有する雰囲気クラス全体に根付かせることができれば、生徒それぞれが自分の立ち位置に応じた学びを得ていき、全体として学習を多角的・多面的に理解していく力が一層育っていくのではないかと考える。

5. 教材について

冷戦は、第二次世界大戦後にアメリカを中心とする西側陣営と、ソ連を中心とする東側陣営との対立構造として展開し、軍事・政治だけでなく経済・文化にまで影響を及ぼした世界規模の緊張関係である。その中で日本は、占領から独立を経て国際社会に復帰し、さらに高度経済成長を遂げていった。冷戦の時代は、一国の歩みが単独に進むものではなく、世界的な対立と協調の中に位置づけられるものであることを示す重要な教材である。

特に生徒は「なぜ日本は短期間で経済成長と国際社会への復帰を果たせたのか」という探究的な問いに取り組むことになる。その過程では、①アメリカとの安全保障体制の形成（サンフランシスコ平和条約、日米安保条約）、②冷戦構造の中で日本が西側陣営に組み込まれていったこと、③朝鮮戦争を契機とする特需景気やその後の産業発展、④高度経済成長を支えた国内の労働力や技術革新、⑤国際機関への加盟やオリンピックの開催といった国際復帰の象徴的出来事、など多面的な要因を考察することになる。たとえば、朝鮮戦争の特需によって鉄鋼や造船といった基幹産業が急速に発展し、それがその後の高度経済成長の基盤となった。さらに、こうした経済的復興を背景に、1956年には国際連合に加盟し、1964年には東京オリンピックを開催するなど、日本は「戦後復興国」から「国際社会

の主要な一員」へと位置づけられていった。このように、国際関係の変化が経済発展を促し、経済成長が国際的地位や社会構造の変化を後押しするという形で、国際関係・経済・社会構造が互いに作用し合いながら日本の戦後史を形づくったことを学ぶ機会となる。

さらに、本単元は、すでに生徒が取り組んだ「GHQの占領政策は何を目的として行われたのか」という立場を限定した探究活動ともつながっている。GHQの占領政策は「民主化」と「非軍事化」を基本方針として実施されたが、その多くは日本の戦後社会の基盤を形づくり、後の経済発展や国際復帰にも深く関わっていた。したがって本時の学習では、既習の占領政策に関する理解を活用しながら、「占領期に日本社会に何が準備されたのか」「独立後の発展をどのように支えたのか」といった問いへと生徒をつなげていくことができる。

また、日本の経済発展は少なくとも二つの段階に分けて捉えることができる。第一の段階は1945～1952年の占領期であり、この時期には朝鮮戦争による特需景気やアメリカからの援助を背景に復興が進んだ。第二の段階は1952年の独立回復以降1973年までの高度経済成長期であり、この時期には日本独自の努力（合理化投資、技術導入と国産化、労働力供給、輸出拡大、産業構造の転換）が重なり、世界でも突出した経済成長を実現した。生徒は特需景気という「きっかけ」には気づきやすいが、そこから「なぜ日本はその後も持続的に成長できたのか」を問い直すことで、1つの出来事の影響ではなく国内外の複合的な条件が日本を成長させたことに気づくことができる。教師はこの場面で、「特需の時期と経済成長の時期を見比べてみて」「日本の産業や人々の生活はどう変わっていったのだろう」と問いかけ、生徒が次の段階の要因を探ろうとする姿勢を育てたい。

さらに、国際社会への復帰を考える際には、単に「西側の一員として復帰した」という理解にとどまらず、二つの側面に分けて考えることができる。一つはサンフランシスコ平和条約や日米安保体制を軸とした西側諸国との国交回復であり、もう一つは1956年の日ソ共同宣言を契機とする東側諸国との国交回復である。生徒にとって「西側の日本がなぜ東側とも国交回復できたのか」という問いは意外性を伴い、探究心を刺激する。ここでは「冷戦下でも完全な断絶ではなく、国際社会に復帰するためには東側との関係修復も必要だった」という歴史的背景を提示し、「日本が国際社会に復帰するためにどのようなバランスをとっていたのか」を生徒に考えさせることができる。例えば、「東側と日本はお互いに国交を回復することでどんなメリットがあったのか」「冷戦下でそのような選択はどのように見られたのか、他にどんな選択があったのか」と問いかけることで、生徒は当時の各国の思惑や利害関係を様々な視点から理解し、外交を考えることができる。

この教材を通じて生徒は、戦後日本の歩みを単なる「経済成長の成功物語」として消費

するのではなく、「なぜそのような発展が可能であったのか」「そこにどのような国際的・社会的条件が作用したのか」といった歴史的な問いを主体的に考える姿勢を養うことができる。同時に、当時の冷戦構造が現在の国際関係や日本の外交・経済のあり方にどうつながっているのか、現在の自分たちの社会と関連づけて考えることも可能になる。

したがって、「冷戦と日本の発展」を学ぶ意義は、単に過去の出来事を理解することにとどまらず、冷戦下という国際環境の中で日本が西側との結びつきを強める一方で、東側とも国交を回復し、他国の思惑に翻弄されながらも協調を模索していった過程を理解することにある。つまり、日本がどのように国際社会の中で自らの立場を築き、社会や経済を発展させてきたのかを多面的に捉える力を育成する点に、この単元の教育的意義がある。そしてその過程で、生徒は「国際社会の中で日本はどのように進むべきか」「私たちは、他国の思惑が交錯する世界の中で、どのように協調や対話を通じて社会を築いていくのか」といった、自らの生活や未来を考える契機を得ることが、この単元の大きな教育的意義である。

6. 指導計画と評価方法

(1) 指導計画 本単元「冷戦と日本の発展」

時間	学習課題	主な学習活動
1	第二次世界大戦後の世界の動きを理解しよう	戦後の世界の動きを教科書と授業スライドを活用し見ていく
2, 3	本単元の探究課題「日本の経済成長と国際社会の復帰がここまで短期間だったのはなぜか？」について教科書や複数の資料、パソコンを使用し学習を進め、自分なりの解釈を完成させる	(単元内自由進度学習) ・冷戦、朝鮮戦争、特需景気、サンフランシスコ平和条約、55年体制、日ソ共同宣言などの事象について理解する ・事象の背景や前後の動きとの因果関係を捉える。 ・事象の相互関係を整理し、構造化(一般化)するなどして自分なりの理解につなげる

(2) 評価について

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・行動観察 ・スプレッドシート	・行動観察 ・スプレッドシート	・行動観察 ・スプレッドシート

(3) 評価基準とルーブリック

○資料・情報活用（技能）

B：教科書から、必要な情報を取り出し、基本的な内容を理解している

A：複数の資料を比較し、違いや共通点に見だし、目的に応じて情報を活用している

S：複数の資料を比較・関連付けながら、得られた情報を整理し、自分なりの解釈に加えて活用している

○因果・相互性（思考力）

B：1つの事象について「なぜ起きたか」または「何を引き起こしたか」を捉えている

A：複数の事象について、それぞれの因果関係を捉えている

S：複数の事象の因果関係や相互の影響を捉え、自分の考えとしてまとめている

○多面的・多角的（思考力）

B：1つ以上の視点（国内・国際の動きや思惑など）から考察している

A：多様な立場や視点を意識し、それぞれの特徴を踏まえて考察している

S：多様な立場や視点を整理・関連付けて、自分なりの考えを構築している

○主体性（主学態）

B：課題解決に向けて、自分でできることを責任を持って取り組もうとしている

A：Bに加え、自分の学びを深めるために適切な学習方法や協働相手を選び、活用している

S：Aに加え、課題との関連を意識しながら自分で疑問を見つけ、解決に向けて主体的に取り組んでいる

7. 本時の指導

(1) 題材 冷戦と日本の発展

(2) 目標

冷戦という世界背景の中で戦後経済的、国際的にもどん底だった日本がどのようにして経済発展、国交回復に至ったのかを様々な観点（アメリカ・ソ連の思惑、日本の思惑、独立国の思惑など）【多面的】や複雑な要因（国際関係、政治、経済、世論形成など）を多角的に捉え、自分なりの考えを根拠をもとに持つことができる。

(3) 学習過程における手立て（教師主語）※数字(①～④)は(5)指導過程に対応

①課題の設定	②情報の収集	③整理・分析	④まとめ・表現
課題や事象に対して解釈・理解を深めるために、みんなの疑問の活用を促す。	複数の教科書を用意し、適時活用を促す。	ループリックに示す良い整理の仕方は共有する。	学習の深まりそうな協働相手をつなげる。みんなの疑問とコメント機能の活用を促す。

(4) 準備物

スプレッドシート (ループリック、リンク、振り返り) 概要資料、思考整理ドキュメント

(5) 指導過程

1 限目

	時間	学習活動	活動支援・留意点
導入	5分	単元の目標と本時の目標を提示	これからの授業どこに気を配るのか
展開	35分	ヤルタ会談 ⇒国際連合の設立、ドイツ分裂、東ヨーロッパ問題⇒大国2つの思想と各陣営の組織や考え方を共有 ⇒その対立によっておこったこと (冷戦、アジアでの動き、植民地解放) ⇒冷戦の動き具体例 (朝鮮戦争、ベトナム戦争) 植民地解放によりアジアアフリカ会議 (第3勢力) ⇒冷戦の一時的緊張緩和	・自分の考えと流れを再確認 (あくまで世界の動きの紹介) ・世界の動きに着目、適時この動きの中での日本の立ち位置や動きを生徒に想像させる ・アメリカとソ連の思惑とその理由を共有
振り返り	10分	今後の中で特に日本に関わってくる背景を書き出しわかったことを書く。	

2・3 限目

	時間	学習活動	活動の支援・留意点
導入	3分	本時の課題を確認する	・前時の良い学びの例を挙げ、価値づけを行う
展開	40分	① 必要であれば	・重要な考えは赤で

<p>〈立場を明確にした情報収集（例）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アメリカ：冷戦下で日本を西側陣営に取り込みたい → サンフランシスコ平和条約、日米安保条約の締結 ・ 日本政府：独立を回復し、経済発展を実現したい → 技術導入、産業構造の転換、国際機関加盟 ・ 日本国民：豊かな生活を求める → 特需景気を契機とした復興、高度経済成長による生活水準向上 ・ ソ連：日本の復帰を牽制しつつも国交正常化を模索 → 1956年の日ソ共同宣言で国交回復 	<p>ば学習計画の見直しを行う</p> <p>② 教科書に線を引く、ドキュメントに書くなどして情報を収集する。</p> <p>③ 立場や視点を意識して情報を整理する。(アメリカの思惑、日本政府の立場、国民生活など)</p> <p>④ 収集した情報を比較したり関連付けたりして整理分析する。</p> <p>⑤ 課題との関連を意識しながら「なぜ」「どのようにして」などの疑問を持つ</p> <p>⑥ 整理・分析をしたことをもとに自分の考えをまとめ、他</p>	<p>書く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 机間指導で、読み取りの苦手な生徒への支援や線を引く箇所などの確認を行う ・ 工夫の見られるドキュメントを紹介して価値づけを行う。 ・ スプレッドシート内のみんなの疑問を活用 ・ 生徒の疑問や仮説の検証のために必要な資料を提示したり、どのような情報が必要かを問いかけたりする。 ・ 共通又は反対の問いを持つ生徒をできるだけ交流するよう誘導、全員に共有することで理解を深める。みんなの疑問のコメント機能も活用する。
<p>〈事象の相互関係に着目した考察（例）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 朝鮮戦争の特需景気は、日本経済を短期間で回復させた。しかし、それが終わっても高度経済成長が続いたのは、技術導入や労働力供給、輸出拡大などの国内努力があったからである。 ・ サンフランシスコ平和条約により西側諸国との国交を回復したが、同時に日ソ共同宣言で東側との関係も修復することで、日本は国際社会への復帰を広げることができた。 ・ 冷戦構造の中で日本は西側に組み込まれたが、東側との一定の外交関係を維持することで、経済発展に必要な安定した国際環境を整えていった。 		
<p>〈疑問と解決のために必要な資料や情報（例）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なぜ特需景気が終わっても日本の経済成長は続いたのか → 教科書の「日本経済の復興」グラフ ・ なぜ西側の一員である日本が東側（ソ連など）とも国交を回復できたのか → 教科書本文「日ソ共同宣言」、国際社会の動き（ソ連側の思惑、国連加盟の経緯） 		

		人と共有する	
振り返り	7分	スプレッドシートに本時の振り返りをする。	

8. 資料